INFORMATION

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

5月から7月までの予定が決まりましたので、お知らせします。

●

第19回 5月16日（木）
「青い目の禅僧とニッポン」

話題提供者

禅岳寺住職　峰本卓潤さん

ブラジルから禅の修業に来られ、今は寺ももたれ、3人の子どもを育て、日々、大阪市内、府下を僧衣で托鉢。いにしえの仏教僧の姿がそこにあります。風俗、慣習の異なる国から来られ、日本社会にとけこみ日本をどう感じられたか。座談会形式、質問中心で、仏教とは、日本についてを語っていただきます。

●

第20回 6月20日（木）
「遺児たちの心に七色の虹を」

話題提供者

あしなが育英会スタッフ　未定

自死や事故、震災で一瞬に親を亡くした子どもたち。ただでさえつらいのに、偏見や差別を受け、親を救えなかった自分を責める日々。そのつらい体験を乗り越え「つらいのは自分ひとりじゃない」と友との連帯を分かち合う場が「あしなが育英会」です。遺児たちの心の叫びを聞いてあげてください。

●

第21回 7月18日（木）
「クマの棲める豊かな森を」

話題提供者

日本熊森協会　企画推進局長　瀬戸悠子さん

クマが山から降りて来て殺される。今、山にはエサがなくなってきています。「むごい！」と叫んだ尼崎の中学生たちが立ち上がり、野生動物保護のため苦闘し、国をも動かす。スギやヒノキばかりの人工林では、山や森は死んでいき、動物は消え、川も荒廃する。森を守り全生物と共存しなければ人間も生き残れない。

2002年度の会員総会は、5月30日に開催いたします！！

4月、新年度を迎え、事務局一同、決意も新たに今年度もがんばっていきたいと思います。

2001年度も、充実した事業が展開できたのではないかと思っています。今、振り返ってみると、多くの出会いがあったからこそと感じています。

運営委員のみなさんによる新体制になり1年、今年度はさらなる飛躍をめざしていきたいところです。

さて、4月はもっとも会員更新の方が多い時期、ぜひ寺町倶楽部に引き続き、ご参加をお願いします。4月が更新時期となる方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を同封いたしますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いします。

ついては、会員総会を5月30日（木）午後7時からの開会を予定しています。ぜひ多くの会員のみなさんのご参加をお待ちしています。なお、詳しいご案内は、あらためてお送りします。

●

○日時
5月30日（木）
19時開会（予定）

○場所
應典院

【新入会員ご紹介】

（2002年4月4日まで）

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○一般会員

【大阪府】
井上孝雄　枚方市
橋本眞人　堺市

【奈良県】
村田敏克　生駒郡

【兵庫県】
遠山明子　西宮市

○個人会員

【大阪府】
扇谷正夫　大阪市西成区
粕井　宏　柏原市
柳瀬真佐子　大阪市東住吉区
鹿間敬一郎　松原市

サリュ　VOL. 31
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2002年4月5日（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2002 APRIL
vol.31



春、たくさんの「芽生え」が溢れるこの季節にどんな新しい出会いと別れが生まれるのだろう。これから生まれる出会いを楽しみにしつつ、別れをお互いの輝かしい出発ととらえ、新しいつながりの第一歩だと信じたい。

散りゆく桜のはかなさを見つめながら、ふと桜の開花にあと何度立ち会えるのだろうと思う。訪れる春を数えながら、1日を大切に、出会いを大切に、新しいかたちのつながりを大切にしたい。

EVENT REPORT

若きアーティストの競演、連続提携公演終了

寺町倶楽部の大きな事業のひとつ、「連続提携公演」が3月3日の南船北馬一団の公演を最後に無事終了しました。今年は、試験的な取り組みとして、東京の一劇団の参加を得て、在阪劇団との交流の場を持ちました。環境の違う劇団との交流で、それぞれのアーティストたちは何を感じたのか。2月17日の交流会を中心にご報告します。

2002年2月1日（金）から3月3日（日）まで開催された「應典院連続提携公演」が終了しました。参加劇団は南船北馬一団・シアターシンクタンク万化・劇団メロディアスメロン。また本年は初めて、地方から劇団の受入れを行ないました。参加したのは東京の劇団「醜団リンチ」で、メンバー8名が應典院で5日間宿泊。楽屋兼宿泊所となった研修室Aは布団、ゴザ、ホットカーペットがひしめくように敷かれ、食事は台所を使って自炊です。期間中は應典院スタッフの柳澤も泊り込み、施設管理だけでなく提携公演の担当として彼らのサポートにあたりました。本番時には、上記の在阪3劇団が受付などをサポートしてくれたので、心強かったです。

千秋楽の2月17日には、在阪劇団と地方劇団との交流を目的として「4劇団交流会」を行い、劇団員と應典院スタッフが参加し、さまざまな意見交換が行なわれました。

倶楽部運営委員の西島宏さんの進行のもと、各劇団からそれぞれ参加しての感想を発表。醜団リンチ代表・高橋世志男さんは「昨年11月に阿倍野・ロクソドンタで初大阪公演を行なってから、こんなに早く二度目の公演を打てるとは思っていなかった。サポートしてくれた他の劇団と交流する機会をもっと作りたかった」。

南船北馬一団の作・演出を担当した棚瀬美幸さんは「表現方法のまったく異なる、同じテーマを持った作品なので、これから発表する私たちの作品もぜひ見てほしい。動員面でのサポートをもっとできたらよかった」。

シアターシンクタンク万化代表・小田益弘さんは「この交流会が醜団リンチさんとの初顔合わせになってしまったのが残念。もっと早い段階から交流したかった」。

今回は運営スタッフとして参加した劇団メロディアスメロン座長・桂正樹さんも動員協力のことを惜しみつつ「應典院での宿泊は寒くないか、とそればかり気にしていました。受け入れ側として、どこに視点を置いていくのが大切であるのか、改めて考えさせられました」とコメントしました。

芸術支援の一環として開催してきた連続提携公演。新たなステップへ進む前に、「なぜ芸術支援を行なうのか」、そして「應典院が行なうべき支援とは何か」という課題に取り組む必要を感じました。「交流」という言葉に込められたさまざまな思いをどのように昇華させていくのか。一歩一歩、じっくりと取り組んでいきたいと思います。



（報告：柳澤尚樹）

Interview

應典院の柿落とし公演を行った劇団のひとつ、「南船北馬一団」。以来、應典院を拠点に活動を続けるとともに、寺町倶楽部の主催事業では「縁の下の力持ち」ともいえる役割をこなしてくれています。今回の連続提携公演でも、他劇団を受け入れる“ホスト劇団”として企画段階から関わっていただきました。
また、代表を務める棚瀬美幸さんは昨年（2001年）末、「帰りたいうちに」という作品で、第7回日本劇作家協会新人戯曲賞を受賞。
5年の歳月を経た“劇団”と“應典院”を振り返りつつ、棚瀬さんにお話を伺いました。



▲棚瀬美幸さん

――今回のポイントは「大阪以外で活動している劇団の招聘」でしたが、終わってみてどうでした?

「醜団リンチ」の作品は、偶然にも私たちの作品と同じようなモチーフ、母と息子の関係とか、秘密めいた猥雑さを扱っていました。彼らの作品を観て、「私のつくり方とは違うけどおもしろい」と思ったし、だからこそ彼らに私たちの作品を見てもらいたかった。せめてお互いの稽古を見たり、現場に立ち会ったりした後に話し合いをしたかったです。



――地域性の違いは感じた?

作品に関しては、地域性によるのか劇団の色によるものなのか、よくわかりません。劇団を取り巻く環境でいえば、「東京に比べて大阪は、劇団同士の仲がいい」といわれました。以前からそういう風評は聞いていたので、改めて「そうなのかな」と思ったぐらいで……。

――今回はスペインの劇作家アラバールの原作を、大胆に再構成していましたね。自分で書かずに演出に専念したのはどうして?

賞をいただくまでの私は、すごく言葉に頼っていたというか、「作家としてしっかり本を書かなきゃ」という意識が強すぎた。自己を掘り下げるようにして人のドロドロした面を書いていたんですが、それをやめて、初めて外に向かってあっさり書いてみたら、賞をいただけた（笑）。いい意味で力が抜けたというか、さらに新しい試みとして、「戯曲も舞台の一つの素材」というぐらいの感覚でやってみたかったんです。

――賞をもらって他に変化は?

ほとんど変わってません（笑）。個人的には、おかげさまでテレビの仕事が来たりもしましたが、劇団としては……。「団を持ってる」という意識の方が強いので、なんとかしなくちゃと思ってるんですが。

――劇団のこれからの目標は?

地方公演をしたいのと、大阪のお客さんの人数を増やしたい。

――作家として「ものを書くこと」と、代表として劇団運営を考えたりすること、言い換えれば「社会との関わり」に矛盾は感じない?

それが、いまの課題なんです。演劇の世界に入るまでの私は、親や先生から求められる“いい子”を演じていましたが、その反動からか、入ってからは「わがままになりたい」と思っていたし、自分の欲求をストレートに表現してしまえる“強さ”にもあこがれていた。でも最近は、無鉄砲さも持ち合わせながら“正しく、いい大人”になりたいな、と。たとえば大江健三郎さんや谷川俊太郎さんのように、アーティストでありながら、社会と共存していることにあこがれます。それと、社会との接点を増やしていくことで、自分の見える世界を広げていきたいです。

――ところで、棚瀬さんは應典院でずっと表現し続けてくれている。あえて聞くけど、その理由は?

ここに一歩入ると、ピリッと気が引き締まるんですよ。お寺だからかも知れませんが、どんなに仕事で疲れていても入った瞬間に「よし、行くぞ!」と思える。いったん“素”に戻って芝居に打ち込める、そうできるのが大きいんです。

――應典院でやってみたいことや、今後、應典院に望むことは?

演劇以外のイベント、たとえばコモンズフェスタで、演劇人として何かを表現してみたいですね。演劇だけじゃないところが應典院らしさだし、そこに演劇の世界を開く可能性があると思っています。だからここへ来る人、あまり演劇に興味のない人も見てくれる仕掛けというか、呼びかけをお願いしたいですね。もちろん、私たちの側も努力しないといけませんが。

演劇が、演劇人だけの閉じた世界のものにならないように、“劇場”以外のカラーも持ち続けていってほしいです。

――ありがとうございました。

SPECIAL REPORT

「いのち」がふれあう場の創造

～2001年度寺子屋トークをふり返って～

もうすっかり寺町倶楽部の名物企画として定着した寺子屋トーク。2001年度実施の3回を加え、通算30回を数えます。いのちの現在を語るトークセッション、2001年度はどのような「こころ」の共感をよんだのでしょうか。
3回で延べ421名が参加、多士済々なゲストが語る「いのちの現場」からの報告をふり返ってみたいと思います。

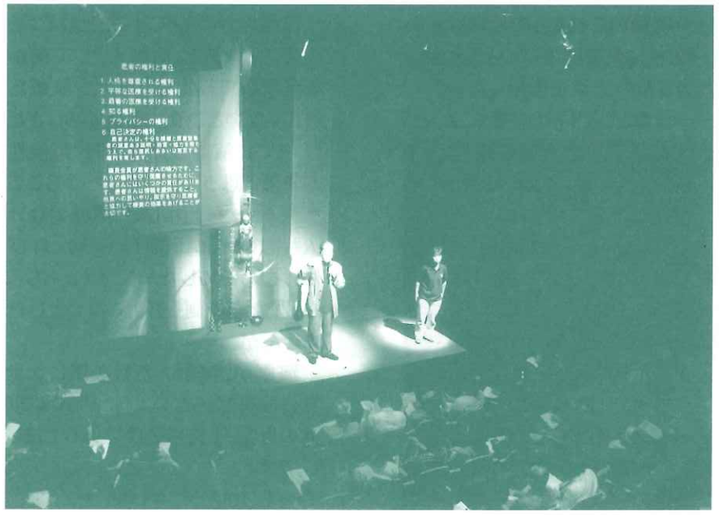
生き方を見つめ直す

丸5年を迎えつつあるいま、「こころの文化の拠点」としての應典院は、対外的にも大きな評価を得るまでになりました。年間2万人を超える来山者、Spiritualの空間は、“素”の自分と向き合い、大きな気づきを与えているのではないでしょうか。

しかしながら、混沌とした現代社会、ここ数年来暗い話題ばかりが目立ちます。年末恒例の今年の世相の漢字、2001年選ばれたのは「戦」。2位以下も「狂」、「乱」、「恐」など、比較的暗いイメージの漢字が選ばれました。それは、生きにくい時代といわれるがごとく、人々の心を表しているとはいえないでしょうか。

過去の寺子屋トークで、ゲストの方が異口同音におっしゃるのは、いまの社会システムの変革でした。競争主義の社会システムは、人々の心の奥深くに排他的で、しかも自己抑圧的な心性を植え付けてきたように思います。その結果、生の実感も、また死の実感もない人生の断片化と瞬間化が進行し、倫理の根本は揺らぎ、崩れてきたのではないでしょうか。人と人の結びつき、関係性が薄れていく社会では、救える命までが失われているのが現実です。

私たち寺町倶楽部の活動は、「共(コモンズ)」の場を提供し、私と公をつなぐ、新たな回路の創出をめざす試み。寺子屋トークのアンケートでは、参加者の多くの方から「自分の生き方を見つめ直すきっかけとなった」との意見をいただきました。



自らへの気づきを

寺子屋トークを主催する私たちの願いは「自らへの気づき」。特定の分野に固執せず、さまざまな分野のゲストをお招きするのも、“学び”のための講習会でなく、主催者、参加者が、互いに気づきあう場でありたいとの思いからです。

自らの気づきは、異質なもの、他者と向き合うことで初めて得られるもの。ゲストの方々からの問いかけは、参加者のみなさんの心に、どのように響いたのでしょうか。

芥川龍之介は自殺する前に、自身は「ただぼんやりした不安から死を選んだ」と書き残しました。ストレスだらけの社会で、「ぼんやりした不安」を抱えている人はどれだけいることでしょうか。

2001年度の寺子屋トークは計3回実施、テーマこそ違えど、「自分らしい生き方」を探るものだったように思います。「ぼんやりとした不安」からの脱却のヒントを数多くいただいた、それぞれの寺子屋トークをふり返ってみましょう。

正解はひとつではない

「人は、ある特定の他人との親密な関係を、生きる上でのベースにしている」。人間関係が希薄な今の社会に、鷲田清一さんのことばは胸に響きました。しかしながら、核家族化した家族形態の中で、親密な関係のみに固執するばかりに、さまざまな問題が生まれているのも事実。「いかにして人間関係をゆるい輪の中にもっていくかを考えないと」という植島啓司さんの問いかけに、人と人とのつながりを結びなおし、どのような社会を私たちが望むのかを考えずにはいられませんでした。



鎌田實さんは、「地域で学ぶ」という姿勢が医者としてのあり方を決定づけるさまざまな“気づき”をもたらしたのだといいます。

「正解はひとつではない。ひとつの方向から見ているだけでは、見えないものがある」。

近年、医学の進歩によって延命が可能となり、平均寿命が年々高くなっています。1分1秒でも延命するということよりも、むしろケアを必要とする人々の自立をいかに支援するか、生命の質、生活の質、人生の質「Quality of Life」をいかに高めるかということが、大切だと感じました。



“いま”を生き抜く

自らへの気づきが寺子屋トークの願いだといいました。では、主催する私たちは、参加してくださるみなさんへ、何ができるのでしょうか。

「その人がその人らしく生きていくにはどうしたらいいかを一緒に考えること」と、自らの活動をふり返って伊藤伸二さんはいいます。COMLでの相談経験から、辻本好子さんがたどりついた答えは、「あるがままを聴いて、問題点の整理ができるよう一緒に考えること」。

ただ寄り添い、支える。競争社会の中で、人と比べたり、評価することに慣れっこになり、忘れてしまっていたこと、人と人とが互いに支えあって生きていくという、ほんとうに大切なものを思い出させていただいたように思います。

「自分の死に方を決めるということは、生きている“いま”を問い直すこと」とは、井上治代さん、小川英爾さんからのメッセージ。相手に寄り添いながら、いまの人生を自分らしく生き抜くというエールを送り続けることが、私たちのできることなのかもしれません。

●

この3回の寺子屋トークは、担当スタッフを決め、そのスタッフを中心に企画・運営までを行いました。開催までには、困難や失敗がありました。しかし、多くの気づきや学び、そしてたくさんの人の支えの中で、何とか無事に終えることができました。

自らの気づき、それは私たちスタッフ自身にもいえること。私たちが、いまの人生を精いっぱい生きながら、「いのち」のふれあう場であり続けるとともに、参加された一人ひとりの方々との出会いを大切にしていきたいと思います。

’01年度 寺子屋トーク開催記録

●第28回　2001年6月16日
「生き方のお手本?
～自分をほどく哲学クリニック～」
関西大学教授・植島啓司さん
大阪大学教授・鷲田清一さん
参加者143名

●第29回　2001年10月8日
「がんばらない」
諏訪中央病院管理者
鎌田實さん
ささえあい医療人権センターCOML代表
辻本好子さん
日本吃音臨床研究会代表
伊藤伸二さん
参加者194名

●第30回　2001年11月11日
「お骨の行方
～人生の店じまいを考える」
ノンフィクション作家
井上治代さん
日蓮宗妙光寺住職
小川英爾さん
参加者84名

累計421名

CLUB TOPICS

「学びあう関係」とは?
インターンを通して見る寺町倶楽部

2001年3月、應典院や寺町倶楽部の活動に興味を持った大学生、来馬司さんと辻牧子さんが應典院を訪れました。2001年度"押しかけインターン"として、事務局の日常業務や事業の企画・運営に関わってくれた約1年間。心強いスタッフの一員として活躍のめざましかった2人にとって、應典院や寺町倶楽部はどのように写ったのでしょうか。ボランティアやインターンと日常的に接点が多く、應典院寺町倶楽部の運営委員長であり、関西NGO協議会の事務局長でもある榛木恵子さんを交え、語っていただきました。

(司会・川井田祥子、文・大塚郁子)

インターンの視点

――インターンとして入った経緯を教えてください。

来馬●應典院のことは、大学の地域文化政策の授業で、地域の文化施設として紹介されて知ったのが最初です。そしてゼミ論文執筆のヒアリングのために訪れ、実家がお寺ということもあり、関心を持ちました。

辻●来馬くんと同じゼミにいて、文化を育てる場所を京都周辺で調べていました。私は美術を中心とした文化施設に関心があったのですが、お寺なのに現代アートの支援をしているところにたいへん興味を持ちました。

来馬●「ボランティアで働きたい」と伝えたら「インターン制度があるから」と、受け入れてもらったというのが経緯です。

榛木●受け入れにはエネルギーも時間も必要ですので、正直なところ「事務局体制は大丈夫かな?」と思いました。でも2人はとっても意欲があり、その上やりたいことが明確だったので、活動の幅の広がる可能性にかけてみようということになりました。

――「学びたい」という気持ちがあり参加したと思いますが、最初にとまどったことは何ですか?

辻●ギャラリーがあると聞いていたものの、その利用者は少なく、紹介する態勢も整っていなかったことですね。思っていたほど美術を扱う施設ではなく、演劇中心の施設だったということにとまどいを感じました。

来馬●辻さんとは違って、お寺の色が少ないことです。とまどいは全然なかったけれど、宗教性が出ていないことに寂しさを感じました。

――担当を受け持ってもらったことについてはどう思いましたか?

来馬●具体的にはコモンズフェスタのモニタープロジェクト、11月の寺子屋トーク「お骨の行方」などを担当したのですが、正直こんなに仕事をさせてもらえると思わなかったので、びっくりしたと同時にうれしかったです。



辻●私が関わったのは、10月の寺子屋トーク「がんばらない」と、コモンズのモニタープロジェクト。具体的な作業に入っていくと、誰に相談すればよいのかわからず、とまどいました。また、スタッフ間で情報を共有することが重荷にもなりましたが、そこがいちばんの勉強になったでしょうか。参考にできる過去の記録がない状況での仕事は、正直たいへんでしたし、学びたい気持ちはあるけれども自分に何ができるか、最初は不安でしたね。

インターンに求められる資質

――目の前にある事業に追われ、マニュアルを作っても次のときに参考にできるかどうかわからないという問題、よくも悪くも「現場主義」というのが、NPOにはついてまわるように思いますが。

榛木●個々の団体がインターンの役割を自覚していないことがあると思います。受け入れにあたって、インターンやボランティアは労働力なのか、プログラムを共に作り上げるパートナーなのか、事務局の人を育てるトレーニングなのか……など、事務局がまずどう捉えるかでしょう。積極的にインターンの役割について話し合う機会は必要だと思いますね。私の所属するNGO協議会でも「学生のインターンを受け入れたら?」といわれますが、そのためには組織内部でも、相手とも充分にミーティングすることが必要です。受け入れればケアにも時間を要します。幸いにも協議会は、インターンの希望者はいますが、情報をほしいので問合せがあるのだと思います。

辻●情報がほしいというのは、どこにいるインターンも同じでしょうね。

榛木●それはいいことなのですが、受け入れる際に求めるのは「影響を与えあう関係が作れるかどうか」ということですね。ところが、学生にリアリティがなく、「何がしたいのか」という問いに答えられない人が多い。大学生活において手に入らない実感というか社会性をインターンになる中に求めてくる人が多いんですね。団体に入るために必要なスキルは基本的にはなくて、むしろ大切なのは柔軟性です。スキルは後でついてきますが、人間関係を築く上で必要な柔軟性と協調性は、一長一短で身につくものではありません。

――インターンとして関わって、学んだことや変わったことはありますか。

来馬●つねに実家のお寺と應典院を対比して、自分が具体的なお寺像を作るためにできること、できないこと、するべきではないこと、などについて参考にさせてもらいました。将来を考えるにあたってのベースを学んだといえるでしょうか。また、そもそも出不精なので(笑)、外に出る楽しさを再確認しましたね。

辻●美術館やギャラリーのような、アートによって確立された場所だけでなく、いろんなことに関心を持っている人にアートがどのような役割を果たすのか、ということを考えていました。学んだのは限定されないことのおもしろさです。変わったことといえば、人になれなれしくするのをやめたこと(笑)。以前は「誰にでも受け入れてもらえる」と信じていました。違いを前提にしてでもお互いを通わせるものがあり、何かができると思っていました。けれど、自分がいままで接していない、自分ではどうすることもできない世界に出会ったときに、通じ合えないこともあるということがわかりました。

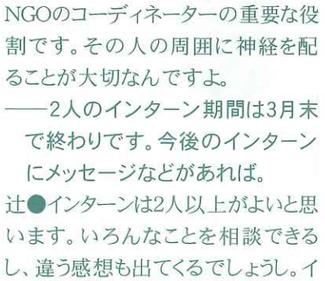
コーディネーターの必要性

――イベントの華やかな部分を見て興味を持ったと思うんですが、仕事はそれだけではなく、イヤにならないかと心配だったのですが。

来馬●予想していたよりイヤではなかったです。強い光には濃い影が差すものだから(笑)。「お寺」という視点で見ていたので、思ったよりすっきりしていました。想像していたのとは違っていましたね。

榛木●お寺、教会はそもそもそういうものですよね。仕事をインターンやボランティアに割り振るときに大切なのは、その人の興味のあることと適性を見きわめることです。単純作業がしたいと思う人と、あまり得意でない人とでは、インターンをしている楽しさが違います。コーディネートをどうするかということは、どこの団体でも出てくる課題で、そこが担当者つまりコーディネーターの腕の見せ所かどうかでしょう。

――受け入れ側のコーディネーターが育つには、何が必要でしょうか。



榛木●ピラミッド型の企業や組織から来た人にとって、NPOやNGOの組織形態は魅力的なのだそうです。けれど、意見などを調整するのが実はたいへんで、ピラミッド型の方が話は早い場合が多い。10人いれば10人の言い分をきちんと聞かなければならないというところがありますから。そこを調整するのはコーディネーターで、やはり仕事に対する関心、興味の度合いを見きわめられるか、その人との会話の中で理解できるかどうかが決め手です。インターンやボランティアを放っておかない。情報を提供して、その人がどこまで動くかということを確認することが、NPOやNGOのコーディネーターの重要な役割です。その人の周囲に神経を配ることが大切なんですよ。

――2人のインターン期間は3月末で終わりです。今後のインターンにメッセージなどがあれば。

辻●インターンは2人以上がよいと思います。いろんなことを相談できるし、違う感想も出てくるでしょうし。インターン同士で考えられるような関係を作った上で、その後にスタッフとも話し合える場を作るようにしていけばいいと思います。

来馬●應典院や仕事内容について、インターンの言いたいことはどん



榛木恵子
應典院寺町倶楽部運営委員長・
関西NGO協議会事務局長
1.「炎のランナー」「エリザベート」
2. エンターテイメントのできる人

来馬　司
インターン・立命館大学4回生
1.「レザボア　ドッグス」「猫が行方不明」
2. マヌエル・ルイ・コスタ(サッカー選手)



※1. いままででもっとも感動した映画　2. 生まれ変わるとしたら何になりたい?
(肩書きは2002年3月現在)



辻　牧子
インターン・立命館大学4回生
1.「パリのレストラン」「イル・ポスティーノ」
2. めっちゃ長生きする樹　永い年月を見てみたい

どん言ったほうがいいですね。そうすることで結果的に應典院のためになればいいと思います。ただ「遠慮しないこと」と「礼儀をわきまえること」の分別はつけないといけないとは思いますが。

辻●学生だからといって、何をしてもいいということではないでしょう。「インターンとして私は何ができるのか」ということをつねに考えること。そして、絶対に意見を言い合える関係を作ってゆくことです。また、チャレンジ精神を持ち続けほしいですね。

――インターン受け入れはこの先も続いていくと思います。最後にアドバイスをいただけますか?

榛木●まず何より、事務局が多くの事業をどう乗り切るかということが課題です。持ちこたえられるかどうかは、スタッフ間のチームワークが決め手。インターン受け入れにも関わる問題でしょう。具体的な作業として、インターンには月間レポートを書いてもらい、何をしてきたかを残し、自己評価できるようなシステム、つまりお互いにふり返られるようなシステムを作る必要があります。受け入れの際には、お互いを知るために意見交換の機会を必ず設けるべきだと思います。また、ゆくゆくは責任をはっきりさせるための應典院のオリジナルなインターン制度を作れるよう、それを見きわめた動きをするべきでしょう。

――ありがとうございました。

Make up Community
コミュニティな人々
ゲスト:井村身恒さん

昨年11月、大阪の生んだ「日本軽佻派」の作家・織田作之助にまつわる映画を集めて"オダサク映画祭"が開催され、クレオ中央の大ホールは満場の賑わいとなりました。

これは、文学や映画の光を当てながら、地域の新しい価値を掘り起こそうとする「文化による地域おこし」。その仕掛け人のひとり井村身恒(いむら・みつね)さんにお話を伺いました。



映画祭は成功でしたが、もともと映画祭だけが目的だったのではありません。私たちはいわば「オダサクおこし」を試みたのであって、まだまだやるべきことは尽きません。織田作自身も、「自分の文学は大阪おこし」と考えていた節があり、それが大阪という"もうひとつの文化都市"に対する織田作の親愛だったんではないでしょうか。

織田作の生まれ育った当時の天王寺界隈は、やや怪しげなところのある路地裏の街でした。船場を中心としたエスタブリッシュな大阪に対し、同じ大阪でも彼は地元にマージナルな、辺境地としての大阪を見て取ったのだと思います。そういう既存のものに対する諧謔(かいぎゃく)というか、織田作のアバンギャルドなところに惹かれますね。

織田作は自作の小説や映画で、大阪の街をいきいきと描き出しています。いまでもスクリーンから、その街の原型が浮かび上がってきます。現在、ここに暮らす人たちが、いわばオダサクという文化資源から何を引き出し、楽しみとすることができるか。せっかくの可能性を小さな文学碑に閉じ込めてしまってはいけない、と思うんですね。

映画祭には、多くは当時を偲ぶシニアの方々でしたが、確信犯的にやって来た若い映画ファンも少なからずいました。まだ40歳ちょいの金秀吉監督が、織田作のドキュメンタリー映画の構想を進めてくれているのもうれしいですね。こういう若い世代に引き継がれながら、街の記憶を耕していくところに、オダサクの可能性を感じます。

文化資源として考えれば、地域のお寺はその最たるもの。昔はお寺が拠点となって、さまざまな文化が生み出されました。でも、いまのお寺の多くは冷ややかですね。今回、映画祭のプレ祭を應典院さんにご協力いただきましたが、地域の文化をお寺が支援することで、いろんな可能性が根づいていくとよいと思いますね。

秋田住職発 應典院掲示板

お寺の桜はもう満開。今年は駆け足で春がやってきました。應典院も間もなく5周年を迎えようとしています。

應典院の本寺・大蓮寺では、この3年越しの計画として、「永代供養墓・自然(じねん)」の建立に取り組んでいます。永代供養墓とは、簡単にいうと、個人が生前に自己決定するお墓。これまでの家中心の"血縁"から、ネットワーク中心の"結縁"を作り出そうとしています。

また、このお墓を触媒にして誕生したのが、独自のエンディング・サポートのシステム。人間はひとりでは死ぬことはできません。人生の終末期(エンディング)を、地域の専門家と相談しながら、相互に支え合う仕組みを作り、そこにパートナーとして多数のNPOに参加していただきました。

いわばお墓を縁に、個人とNPOを結んで、地域の相互支援のシステムを作ろうというもの。ここの中核に應典院も参画しています。

永代供養墓の完成は7月14日。新しいウエブサイトもアップしていますので、ぜひご注目ください。
(http://www.inochi-club.com)

■コンテンツ・ビジネスを語る

去る3月16日、大阪産業創造館で初の試みである「大阪コラボMEETING」が開催、コンテンツ・ビジネスに関わる若いクリエーターら150名が集まりました。当日のテーマは、「大阪を活性化させる魅力あるコンテンツづくりとは」。モデレーターとして、扇町ミュージアムスクエアの山納洋さん、斬新な家具デザインで知られるglafの服部滋樹さんと参加しました。企画を練り上げるには短い時間でしたが、それぞれ分野も世代も違うクリエーターが一堂に会するのは、貴重な機会。今後のつながりと、熱いムーブメントを感じさせる一日でした。

■平田オリザさんと2日間



日本NPOセンター主催の「NPOキャリアアップ・セミナー」(應典院協力)のひとつとして、劇作家の平田オリザさんが3月8日に来山、「世界をとらえる／世界を変える」と題して、演劇知のお話を聴講しました。また翌9日は、日本アートマネジメント学会関西支部の特別講座として、このたび制定された文化芸術振興基本法について、レクチャーいただきました。

平田さんは、應典院再建の97年に2日間にわたってワークショップを主宰いただいて以来の再会、夜には居酒屋で楽しく懇談させていただきました。ありがとうございました。

■総合生涯学習センターの提言

今年11月に、大阪市教育委員会が大阪駅前に新設する総合生涯学習センターの開館に向けたNPO懇話会が、3月25日に開催され、アドバイザーのひとりとして参加してきました。これは従来の生涯学習施設(市民学習センターや生涯学習ルーム)を統括する核施設で、とくに市民・NPOとの協働を目標として掲げているもの。学習環境が整うのはもちろんいいことですが、ハード面だけでなく、人材づくりや仕組みづくりがなくては、宝の持ち腐れです。

NPOと協働した事業プログラムの開発や、運営に関わる官民混成の委員会など、新しい提案が出され次に期待をつなぎました。

■25霊場参拝団のファイナル

96年からスタートした法然上人25霊場参拝バスツアーも、いよいよ最終回。来る5月19日の第11回をもって満行となります。

今回は、京都市中の名刹を4カ寺、浄土宗の大本山である金戒光明寺、清浄華院、西山派の総本山誓願寺、そして文字通り6年間のお礼参りに総本山知恩院を巡拝します。

お念仏の声に誘われて、心温まる一日をご一緒に過ごしましょう。参加費1万円。定員45名(お申し込みは應典院まで)。

上座部仏教の聖地・ミャンマーを行く

去る2月14日から21日まで、上座部仏教(いわゆる小乗仏教)の聖地ミャンマーを旅しました。昨年のインドに続き、全青協の「いのちを観じるスタディツアー」に参加。

最大の目的は、お釈迦さまの時代の仏教をいまも正統に継承しているミャンマーのお坊さんと交流することでしたが、国民4500万人のうち40万人ものお坊さんがいる仏教大国、町のあちこちにあるパゴダ(仏塔)、僧侶の学校や瞑想センターなど、生活の根っこまで浸透したお国柄はすばらしいものがありました。

メッティーラ、パガン、ヤンゴンを歴訪、さらにタイに足を伸ばし、念願だったエイズホスピス＝プラバートナンプ寺院も見学することができました。

もうひとつの目的は、現地で活躍する邦人NGOの視察でしたが、中には出家者もいて、アジアのあちこちに生きる日本人の多様性を頼もしくも思いました。

